

先進校に学ぶキャリア教育の実践

CASE 2

愛媛・県立 **北宇和高校**

失敗を恐れない地域連携が  
「社会性」「責任感」「自信」を生む

取材・文／永井ミカ



≫実践ノウハウ

- 授業で学ぶことをそのまま連携学習に生かす
- 地域に協力を仰ぎ、文部科学省の事業を継承
- 生徒一人ひとりに責任をもたせる

愛媛県西南部に位置する鬼北町は、2005年に町村合併によってできた人口およそ1万2000人の町。周囲を1000m級の山に囲まれた中山間地域で豊かな自然に恵まれている。その鬼北町で唯一の高校が北宇和高校。1938年に農業学校として開校し、10年後に普通科、農業科を設置する総合高校となった。その後、幾度かの学科改編を経て、現在は農業科は生産食品科と名称を変え、2学年からは生産類型と食品類型の類型制を導入している(図1)。その生産食品科(農業科)は、古くから農家や企業、地域の人々と、技術や学校設備の提供などの協働を図ってきた。そして、近年はより積極的に連携学習を展開。町の協力も得て、地元小中学校との連携プログラム「わくわく農園」を中心に、農業教育を通したキャリア教育を実践している。

子どもから大人まで

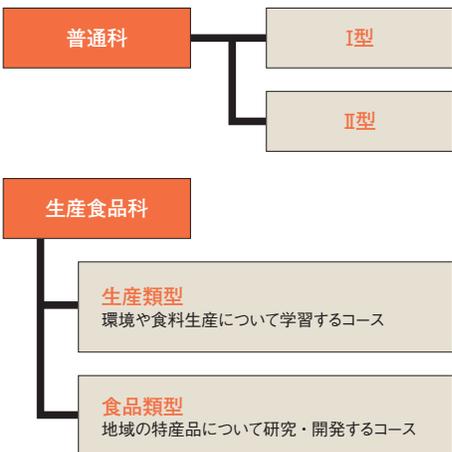
多くの人と接しながらの学習

北宇和高校生産食品科が実践しているのは、専門高校の特性を生かした地域連携。小学生や中学生、または地域の大人たちを相手に、技術を教えたり、一緒に作業をして汗を流したり、また自分たちの作った商品を販売することもある。学校は常に地域に開かれており、生徒が校外に出かける機会も多い。例えば休日も地方祭な

ど様々なイベントに参加し、地域の活性化に役買っている。

連携学習に力を入れるのは2学年からで、まずは食品作りや栽培など小中学生との連携プログラム「わくわく農園」が中心だ。専門分野について小中学生に指導する体験だが、あくまでも専門高校の授業の「環」として、単なるボランティアにならないよう工夫。例えば、花壇作りなどは将来的に小学校の教員や生徒が自分たちでできるように、小学校に出向いて指導していく。3回、4回と回数を重ねることに生徒たちには社会性が身につく。この経験をふまえて、3年生になれば地域の人向けの開放講座で講師をしたり、希望する生徒(全体の約半数)は半年間のインターンシップも経験。継続的に様々なタイプの連携学習を行うことで、社会性はもちろん責任感や自信を育んでいる。

図1 北宇和高校の学科と専攻



>> School Data

生産食料科・普通科 / 1938年創立  
 生徒数 / 324人(男子164人・女子160人)  
 進路状況(2008年度実績) / 大学 16%・  
 短大 13%・専門学校 37%・就職 34%  
 愛媛県北宇和郡鬼北町近永942  
 TEL 0895-45-1241  
 URL http://kitaewa-h.esnet.ed.jp/

Process  
 立ち上げのプロセス

「農業教育のよさを伝えたい」という気持ちが原点

「農業教育は生徒を成長させる」……長年、そう感じてきたという教頭の川上千代先生。北宇和高校には同様の考えをもつ教員が少なくない。

20年ほど前、全国的に中学校や高校が荒れている時代があり、同校も例外ではなかった。やがて教育現場が落ち着きを取り戻し始めると、同校の教員たちは「学校がよくなり始めている。この機会に農業教育のよさを外部に発信したい」と考えるようになっていた。また、「生徒たちを外で活躍させたい、もっと鍛えたい」という思いもあった。

「思い切って少しずつ生徒を外に出し、少しずつ地域に認められていきました」と川上先生。最初は地域に迷惑をかけることもあった。それでも、地域の人たちは、リヤカーで花苗を売り歩く生徒や、専門技術を披露する生徒に声をかけ、「一緒に育ててくれた。」「地域で唯一の高校をよくしたい」という思いは、校外外で広がっていったのである。

県と国の指定を受けたのち、町として小中高連携を継続

こうした地道な活動を経て94年度からスタートしたのが、徒歩5分程度の場所にある近永小

学校との連携プログラム「わくわく農園」である。この頃、生徒たちからは「もっと学校をよくしたい」という前向きな声も聞こえてきていた。教員たちには地域に認められてきたという手応えがあった。そして、小学校には生活科が導入された。様々なタイミングが重なり、小学校に子どもを通わせる教員のアイデアから連携プログラムがスタートした(図2)。

小学生たちに農園(高校)に来てもらい、一緒に米や野菜を栽培し、パンなどの加工品を作り、収穫感謝祭を開く。馬を飼い、馬場を整備し、乗馬体験もできるようになった。当時は効果を疑問視する教員もあり、授業に組み込むことが難しい分野もあった。そこで、賛同する教員が普段の授業のなかに無理なく取り入れられる範囲で実施するという形をとった。

99年、同プログラムは県の研究指定を受ける。そして03年には文部科学省委嘱事業として、町内の全小中学校と連携することとなった。この頃には、後片付けから準備までかなりの部分が生徒主導になっており、学科全体で取り組むことに異論を唱える者はいなかった。文部科学省の事業が2年で終了した後も、町の補助事業として継続。材料費や苗代などが補助されるほか小中学校に送迎バスを出してもらえる。こうして昨年度も、鬼北町の全小中学校と、合計34回の連携学習の時間を設けることができた。

また、小中学校との連携だけでなく、インターネットや商品開発・販売、地域イベント参加な

図2 小中学校との連携プログラムの拡充の経緯

年度	連携小中学校	主な内容	特記事項
94~98年度	近永小	・稲作り(田植え、合鴨放飼、稲刈り) ・野菜栽培(サツマイモ、トウモロコシ) ・クッキー、アイスクリーム、ラーメン、プリン、メロンパン、豆腐の製造・乗馬体験 等 ・「収穫感謝祭」で案山子コンテストを実施(98年度)	・「わくわく農園」と命名 ・「収穫感謝祭」を実施
99年度	近永小	(94~98年度と同じ)	・愛媛県県立学校研究指定校(農業)となる。研究主題を「『生きる力』を育てるための農業教育の推進-開かれた学校づくりの中で-」と設定する
	広見中	・バイオテクノロジー実習 ・環境制御実習 ・マドレーヌ、プリン、パンの製造 ・食品化学実験 等	
00~02年度	近永小	・稲作り ・野菜栽培 ・バイオテクノロジー実習 ・メロンパン、クッキー、マドレーヌ、バナナ大福、手打ちうどん、乳酸飲料の製造	・00年度から各活動を生徒主導に完全移行 ・02年度から、近永小6年生「学級PTA」と連携して、保護者の参加を呼びかける
03~04年度	(旧)広見町内小学校5校	(00~02年度と同じ) ・小学校を訪問して実施する「出前授業」を開始	・文部科学省委嘱事業「愛媛県みんなの専門高校プロジェクト」
	広見中	・バイオテクノロジー実習 ・押し花コサージュ実習	
05~08年度	鬼北町内小学校6校	(00~02年度と同じ)	・「ふるさといきいき連携学習事業」と名称変更、鬼北町の補助事業となる
	鬼北町内中学校2校	(03~04年度と同じ)	



生産食品科生産類型作物専攻部門「作物」の稲刈りの授業。田植えも同じメンバーで、継続的に連携学習をしている。



生産食品科食品類型畜産加工専攻部門「食品製造」の豆腐作りの授業。高校生はこれまで何度か授業で経験しているので、自信をもって指導ができる。



生産食品科食品類型農産加工専攻部門「食品製造」のメロンパン作りの授業。小学生3人に高校生1人で1グループ。1人で指導することで責任感をもたせる。

図3 連携プログラム実施内容(2009年度)

	好藤小学校	愛治小学校	三島小学校	泉小学校	近永小学校	日吉小学校	広見中学校	日吉中学校
作物					1年生・花組 ・田植え ・稲刈り ・もちつき		2年生 ・ラン交配 ・無菌播種	
バイオテクノロジー								
野菜作り			3~6年生 ・野菜の定植 ・野菜収穫	1・2年生 ・野菜の定植 ・野菜収穫	2年生・花組 ・野菜の定植 ・さつまいも作り ・野菜収穫	1・2年生 ・さつまいも作り (分校)		
草花作り	1~3年生 ・花苗植え ・押し花作り	1・2年生 ・花苗植え ・押し花作り			1年生・花組 ・花作り	全校 ・花作り(分校)	2年生 ・コサージュ作り	2年生 ・コサージュ作り
食品製造 (農産・畜産)	6年生 ・豆腐作り 4・5年生 ・パン作り ・メロンパン作り	3~6年生 ・パン作り	3~6年生 ・豆腐作り ・マドレーヌ作り	3・4年生 ・乳酸飲料作り 1・2年生 ・パン作り	6年生 ・米パン、乳酸飲料作り 1・2年生 ・マドレーヌ、豆腐作り			

図4 連携プログラムの位置づけとねらい

<p>■生産類型 作物専攻 位置づけ/2学年「作物」計6時間 実施内容/田植え、稲刈り、餅つき ねらい/○小学生に稲作りの体験を通して、自然を愛する心、食文化への興味・関心を持たせる。 ○高校生に指導的立場を経験させることで、人に教える喜びを味わわせ、学ぶ意欲を持たせるとともに、社会性やコミュニケーション能力を身に付けさせる。</p>
<p>■生産類型 植物バイオテクノロジー専攻 位置づけ/3学年「総合実習」計4時間 実施内容/コショウランの交配実習、無菌播種、培地の作成 ねらい/○バイオテクノロジーに関する専門的な知識や技術を中学生に伝えることで、学習の専門性に自信を持たせる。 ○専門的な知識・技術を中学生に指導することで、生産食品科の特性を高校生に理解させる。 ○中学生にわかりやすく指導するために、高校生自身に自ら学習しようとする意欲を高めさせる。</p>
<p>■生産類型 野菜専攻 位置づけ/2学年「総合実習」8時間、2学年「野菜」8時間 実施内容/夏野菜の定植、秋野菜の定植・播種 ねらい/○小学生に野菜を育てる喜びを伝えることで、高校生に指導する能力を身に付けさせる。 ○小学生と野菜を共同栽培させ、圃場管理に強い責任感を持たせる。 ○交流学習を通して、北宇和高校の活動及び生徒の取り組み姿勢を地域に発信する。</p>
<p>■生産類型 草花専攻 位置づけ/2学年「総合実習」12時間、2学年「草花」2時間、3学年「総合実習」16時間 実施内容/花苗の定植、花の播種、押し花を使ったフラワーアレンジメント ねらい/○地域のボランティア活動に専門性が生かされることで、生徒に自信や誇りを持たせる。 ○地域の花壇を整備することで、学校と地域とのパートナーシップの確立を目指す。 ○小学生とともに花植え等を体験させることで、自然や農業の大切さを理解し、環境を保全することへの興味・関心を持たせる。 ○高校生に指導的立場を体験させることで、人に教える喜びと学ぶ意欲を持たせるとともに、社会性やコミュニケーション能力を身に付けさせる。</p>
<p>■食品類型 農産加工専攻 位置づけ/2学年「食品製造」16時間 実施内容/パン、マドレーヌ、クッキーの製造 ねらい/○連携学習で栽培した野菜や作物が加工された製品となる過程を体験的に理解させる。 ○交流を通して、指導性・社会性を身に付けさせる。 ○農業の楽しさを小学生に伝え、学科の魅力を体験させる。</p>
<p>■食品類型 畜産加工専攻 位置づけ/2学年「食品製造」16時間 実施内容/乳酸飲料、こんにやく、豆腐、アイスクリームの製造 ねらい/○地域農作物の加工を通して、地域農業への興味・関心を持たせる。 ○小学生に指導することで、高校生の学習意欲の高揚を図る。 ○食品を製造する喜びを小学生に伝えるとともに、学校の特色を地域に発信する。</p>

ど、多角的に地域連携を展開。伝統ある開放講座なども変わらず継続し、地域の中で期待される存在となっていくのである。

### Close up ① 小中学校との連携

## 責任感をもたせるために ひとりで指導させる

高校2年生が小学4、5年生にメロンパン作りを教える授業。「こうやって生地を丸めて、別の生地を上からかぶせる。次に菱形の編み目模様をつけるんだけど、菱形ってわかる？ もう学校で習った？」と高校生。しっかり教えていても、小学

生の手が小さすぎてきれいな形にならず苦心している。火を使う豆腐作りでは、焦げないように、吹きこぼれないように、慎重に鍋の中を混ぜる高校生の手元を小学6年生が注目。失敗が許されない緊張した場面だ。同じ時間、屋外では高校2年生と小学1年生が汗を流して稲刈り。転んでしまった小学生に、高校生が「大丈夫？」と手を差し伸べる(写真参照)。

こうした授業は、「回数を重ねることに生徒たちに自信と責任感がついてきます」というのは、生産食品科主任の富永知利先生。小中学校との連携プログラムは、2学年を中心に「総合実習」などの教科を利用して年間30回以上開催する。生徒たちは6つの専攻部門に分かれ、ひとりの生



生産食品科主任  
富永知利先生



教頭  
川上千代先生

徒がおよそ5、6回の連携授業を体験。例えば、作物専攻の生徒たちは2学年の「作物」の授業6時間を使い、小学生と一緒に田植え、稲刈り、餅つき、収穫祭などを行うのである(図3・4)。

小中学生を指導するときには、数人のグループに高校生ひとりをつけるのが原則。自分が話さなければそのグループは何もできないという状況に置かれる。食品作りなどは授業で何度も練習し、前日の放課後などを使って準備も生徒自身が行う。それでも時には失敗もあり、楽しみにしていた小中学生が心底がっかりする姿も。「失敗してこそ、次の学習意欲につながったり、次回はコミュニケーションをとろうとがんばります」と富永先生。授業のあとには必ず反省会を行い、記録簿をつける。これで確実に指導する力がついてくるという。

### プログラムが増えても それに見合う成長がある

小中学生との連携で大人とのコミュニケーション能力もアップする。「おそらく、教える。側の立場というものを理解するようになるのでしょ。また、小さい子どもと接するには非常に細かい配慮が必要で、自分が大人にならないといけません。こういった経験を重ねると、様々な年齢の人とのコミュニケーション能力がアップします」と川上先生はいう。

03年、文部科学省の指定で急にプログラムを

拡大した際、多くの教員がすぐに協力体制をしたのは、それまでの取り組みで生徒たちの成長ぶりが感じられたからだ。学習の中で培われた専門性に自信をもち、連携学習とは関係ない学習への意欲も高まる。他者や地域全体に目を向けるようになり、社会性が身につく。連携プログラムの効果は様々だ。「今は非常に多忙ですが、それに見合うだけの生徒の成長があります」と富永先生。最近では、このプログラムを小中学校で経験し、はつきりと北宇和高校で学びたいという意志をもって入学してくるケースも増えてきた。ひとりの生徒が教えられる立場と教える立場を経験し、地域連携がさらなる広がりを見せている。

「あいつから教えてもらおう  
地域の人の触れ合い」  
同校が地域と連携している例は大小様々(図5)。たとえ規模が小さく地道な取り組みでも、生徒は伸びる。「リヤカーで苗を売り歩いて最初は声も出せません。すると地域の方が『これはどうやって育てるの?』などと声をかけてくれます。それに答えることができないから、次はメモを持つていくなどの工夫をします。地域の方には人との接し方から教えていただいて、本当に勉強に

図5 様々な地域連携の取り組み

実施学年	内容
小中学校との連携学習	2・3学年 図2・3・4参照
開放講座	3学年 地域住民に向けた講座で、20年近い歴史がある。生産類型専攻は洋ランの移植、押し花作品製作、ボカシ肥料の作り方など、食品類型専攻はクッキー・メロンパン・こんにゃく・豆腐・納豆・ヨーグルト製造などの講座を、休日などに開講している
先進地視察・企業見学	全学年 毎年11月、全学年で実施。アサヒビール西条工場などの企業や植物園、牧場などを視察
現場実習(3日間)	2学年 食品類型専攻の2学年全員が対象。食品関連の事業所などで夏季休業に実施
現場実習(約半年間)	3学年 3学年の希望者が、週に一度、午後から食品関連の事業所や保育所、老人ホームなどで現場実習。なお、希望者は事前に3日間の職場体験をし、自己の適性を判断して参加する
特産品の開発	2・3学年 地元産米の加工品開発を中心に、2・3学年が専攻班ごとに取り組む。米粉パン、米粉キジ肉まんなどを製造した
地域イベント参加	全学年 地域のイベントで、農産物販売や加工品の研究成果発表を実施
環境保全啓蒙活動	2・3学年 広見川の水質調査結果や、生徒が考案した水質浄化装置を発表
文化祭での成果発表	全学年 地域行事企画プロジェクトとして取り組んだ、各種特産品の展示と試食、連携学習の活動状況報告などを実施
まちおこし講演会	全学年 地域の農業高校生のあり方をテーマに講演会を開催
商品販売	全学年 校内の売店でチーズケーキやジャムなどの加工品を販売。また、リヤカーで校外に出かけ草花や苗を売り歩く実習を、伝統的に行っている

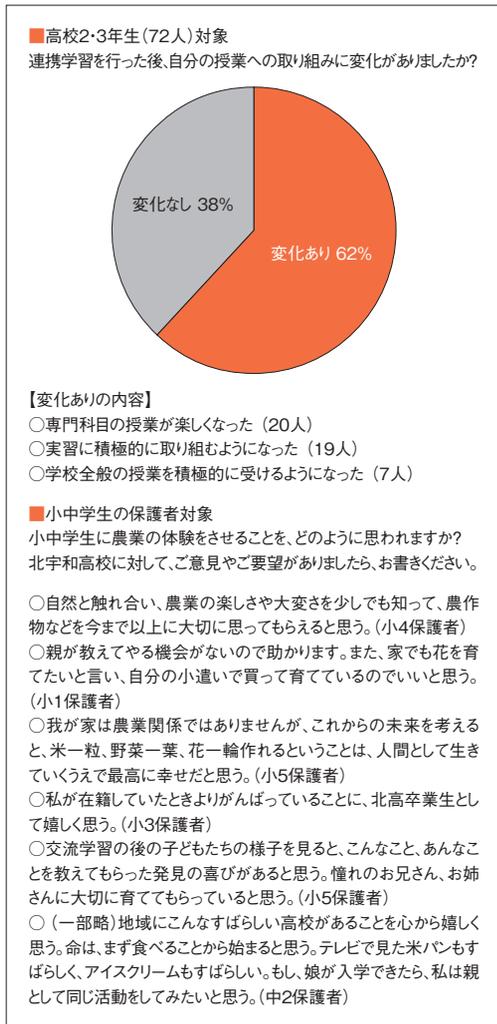
Close up ②

地域の中の高校



町が小中学生の送迎バスを出してくれていることで、連携プログラムが継続できている。

## 図6 連携プログラム後のアンケートより



なっています」と富永先生はいう。

小中学校との連携が始まる前、同校の主な地域連携は開放講座だった。地域住民に対し、3年生が栽培や食品加工などの専門的な技術を伝える講座だ。「以前は、参加者から促されてやっと説明し始めるような状態でしたが、最近では自信をもって指導するようになり、任せても安心になりました」と富永先生はいう。

このほか、商品開発にも積極的に、農協や婦人会などから商品開発の依頼がくることも。町特産のキジ肉を使った肉まんは08年の日本学校農業クラブ四国大会で最優秀賞に輝いた。

そして、学習の集大成として3学年で課題研究を行うが、選択肢のひとつに、半年間、週に一度3時間のインターンシップがある。希望者はまず春季休業日に3日間の職場体験をし、適性があるかどうかを自己判断。こうして、例年およそ半分の

生徒がインターンシップを経験する。3日間の体験期間があることで、生徒は進路を真剣に考えるようになり、受け入れ先に迷惑をかけるリスクも軽減できる。ケア施設や保育所、食品会社などの周辺施設は、雇用予定がなくても後輩を育てるという気持ちで生徒たちを受け入れてくれる。これも、地域から学校が信頼されるようになった証。地域と学校の良好な関係をこれからも継続していくよう、多くの人が協力しあっているのである。

● 現在、専業農家が減少し、生産食品科の卒業生がそのまま就農することはほとんどない。食品関係への就職や進学のほか、無関係の進路へ進む生徒も、「だからといって普通科に劣ることはありません。むしろ生産食品科で身につけた社会性と自信が、あらゆる分野で役立ついるのでは」と川上先生。これらの取り組みは、生徒はもちろん、小中学

## REPORT

### 連携プログラムを終えての感想 (同じ生徒が小学2年と高校2年のときに書いたもの)

〇わくわく農園に行くようになって、かもやうまやひつじを、よく見ることができました。どうぶつが大きいので、いつも楽しみでした。かもをはなすとき、すいすいおよいでいました。とてもやくすむので、びっくりしてしまいました。かもを田んぼにはなすと、お米についているわるい虫を食べてくれるのだそうです。かもってえらいね。2年生では、いろいろな野さいやおかしなどを作りました。作ったなかで、一番びっくりしたのは、らっかせいでした。それまで木になっているのかなと思っていたら、なんと土の中にいっばいできていました。ほんとうにおどろきました。さとうきびからさとうがとれることも、おしえてもらいました。さとうきびは竹みたいでした。2年のわくわく農園のペンギンでは、たくさんのお兄さん、お姉さん、先生たちが、とてもやさしくおしえてくれました。アイスクリームや、クッキーやポップコーンもまた作ってみました。いままで、手つだってもらって、とてもかんしゃしています。ありがとう。わたしも、だれかにおしえてあげたいよ。(小学2年)

○小学1年生の時に、田植えと稲刈り、小学6年生になって食品製造をやりました。小学生の時のわくわくは楽しく、高校生のお兄さんお姉さんがすごく優しく接してくれました。(中略)教える立場になって、緊張、不安がありました。小学生の時のわくわくは見ながら、昔のことを思い出して、教える楽しみを感じようになりました。でも、実際に教えてみると、とても難しいということがわかりました。自分ではわかっているのに、そのことを相手に伝えることができませんでした。今だったら、小学生のころ教えてもらったように、子どもたちに接することができます。小学生にとっても、私たちにとっても、とてもいい経験になるので、これからも続けてほしいと思います。(高校2年)

生や保護者など地域の人が好評だ(図6)。

一方、課題は中学校との連携だ。北宇和高校としては生徒募集も兼ねて連携を強化したが、かつて小学生向けの授業のレベルを少し上げただけでは満足しなかったという失敗もあった。中学生の時間確保も難しいなか、より専門的で興味を引く中身の濃いプログラムを模索中である。